

9年前のスポーツ少年団活動に関する想起の正確性と 想起の変化に関連する要因

Accuracy in remembering Junior Sports Club 9 years ago
and factors related to changes of remembering

青木 邦男 (山口県立大学社会福祉学部)

Kunio AOKI

I. はじめに

質問紙法（あるいは質問紙調査法）は社会調査における主要な調査法の一つで、体育学研究やスポーツ諸科学の研究においても頻繁に用いられている。研究法としての質問紙法の特徴は、調査の実施が容易で、費用が比較的安価であり、かつ多人数を比較的短時間で調査することができるが、反面で適応年齢の制限や回答・情報の質的深さや信頼性の確保が重要な問題として内在している（西田・新，1980；見田ほか，1988；鎌原ほか，1998）。回答・情報の質的深さという問題点については、一つの側面について複数の質問項目や自由記述を利用するなど、質問項目の作成や構成の工夫によって、質的深さを高めることが可能である。一方、歪曲した回答や虚偽の回答の混入という信頼性の問題については、歪曲・虚偽の回答の混入は研究そのものを歪め、研究結果の信頼性や妥当性を無効にしてしまうために、質問紙法自体の極めて重要な問題となっている。質問紙法が自己報告に基づくために歪曲・虚偽の回答の混入は避けられないものであるが、歪曲・虚偽の回答の混入をできるだけ防ぐために、ウソや偏りが生じる回答者側の原因を経験的に明らかにして、その原因を極力取り除く方策を講じたり、虚偽尺度を導入して回答の歪曲や虚偽をチェックすることが試みられている（辻・有馬，1987；鎌原ほか，1998；村田・山田，2000）。

ところで、回答の信頼性については歪曲や虚偽の回答の他に、想起の正確性の問題がある。想起

とは覚えたこと（記銘）を後で思い出すことである（田中，1988；市川ほか，1994）が、想起の不正確性は、特に質問紙による後向き研究（retrospective study）においては歪曲や虚偽の回答と同様に調査結果を歪めてしまう。加えて、回答者が想起した内容を意識的に歪め、あるいは偽って答えない限り、虚偽尺度ではチェックできない。そのために、想起の内容の正確性をチェックすることは甚だ難しいと言える。しかし、体育学研究やスポーツ諸科学の研究において、この想起による回答を多用した質問紙法による調査は頻繁に行われている。例えば、スポーツへの社会化に関する研究（江刺，1982；海老原，1991；山口，1994）、スポーツ参加や離脱に関する研究（海老原，1988；青木，1989；山本，1990；稲地・千駄，1992；谷口・古谷，1993；松尾ほか，1994；樋上ほか，1996）、スポーツ行動に関する研究（松田ほか，1979；徳永ほか，1985；金崎・橋本，1995；青木，1996）、スポーツキャリア・パターンやライフスタイルに関する研究（筒井ほか，1996；北村ほか，1997）等では、想起による回答が研究法の枢要となっており、想起なしでは研究が成り立たないものとなっている。これらの研究は想起の正確性を暗黙理に前提とした研究となっており、僅かに考察等で想起の正確性について危惧が表明されている場合もあるものの、想起の信頼性を織り込んだ結果や考察はほとんどなされていない。

ところで、個人の過去に起こった出来事や経験

にかかわる記憶は自伝的記憶と呼ばれ、その記憶の想起時には再構成的想起がなされることが次第に明らかにされつつある。つまり、自伝的記憶が想起される際、過去の出来事や経験のレプリカがそのままの形で機械的に再現されるわけではなく、想起時に今ここの再構成がなされ、想起時の状況によって、想起される内容（自伝的記憶）の選択や歪みが生じることになる（Bruner, 1994; Ross and Buehler, 1994; 高野, 1995; 佐々木, 1996; 佐藤, 1998; 遠藤, 1999; 太田・多鹿, 2000）。自伝的記憶の想起時に再構成的想起がなされるのであれば、体育学研究やスポーツ諸科学において頻繁に使用されている想起に基づく質問紙法について、その回答や研究結果の信頼性や限界を再考することが必要であろう。

そこで本研究は、想起に基づく回答の正確性や信頼性を検討するための先駆的な研究として、9年前のスポーツ少年団活動について、その想起の正確性と想起の変化に関連する要因を明らかにすることを目的として縦断的な調査研究を行ったので報告する。

II. 方法

1. 調査対象と調査方法

1990年9月から11月に、Y県下Y市のスポーツ少年団登録の36団の団員953名（男子667名、女子286名）を調査対象者として、スポーツ少年団（以下、「スポ少」と略す）活動と学校生活の関連についての質問紙調査を実施した（青木, 1996）。調査の結果、各団につき2回にわたる調査を完了し、かつ欠損値のない有効標本数は611名であった。その調査の際に、両親及び指導者に、後年に再調査を行いたい旨の依頼を行い、承諾いただける場合は名前と住所を明記いただけるようにしておいた。その結果、有効標本数611名のうち、446名の承諾を得た。そこで、今回はその446名全員に対して、質問紙による郵送法で再調査を依頼した。その結果、転居で配達不能が67名、回答回収が236名であった。回収のうち、本研究で分析する項目に欠損値のない218名（男性148名、女性70名）を分析対象者とした。分析対象者の基本的属性を表1に示す。

表1. 分析対象者の基本的属性

項目	男性	女性
1. 性	148 (67.9%)	70 (32.1%)
2. 年齢 (平均値±標準偏差)	19.6±0.53	19.5±0.50
3. 結婚		
1) 既婚	4 (2.7%)	0 (0.0%)
2) 未婚	144 (97.3%)	70 (100.0%)
4. 学歴		
1) 高卒	43 (29.1%)	26 (37.1%)
2) 専門・専修学校在学 (卒)	17 (11.5%)	6 (8.6%)
3) 短大・高専在学 (卒)	6 (4.1%)	16 (22.9%)
4) 4年制大学在学	82 (55.4%)	18 (25.7%)
5) その他	0 (0.0%)	4 (5.7%)
5. スポーツ実施		
1) 実施	73 (49.3%)	18 (25.7%)
2) 非実施	72 (50.7%)	52 (74.3%)

1) 性は%表示を男女間で、それ以外は%表示を縦（項目内）にみる。

2. 調査期間

1999年9月から10月である。

3. 調査内容

調査紙の内容は、基本的属性、9年前のスポ少活動に関する調査項目と同様の質問項目、9年前のスポ少活動に関する項目の評価の想起と現在の評価及び現在のスポーツ活動状況やスポーツ観等を調べる調査項目で構成した。それらの具体的な内容と点数化は以下のとおりである。

- 1) 基本的属性：性、年齢、結婚の有無、学・職歴などを調査した。
- 2) 9年前のスポ少活動に関する調査項目と同様の質問項目：想起の正確性を検討するために、9年前にスポ少活動に関する調査項目で用いた質問項目と同一である質問項目、すなわち「スポ少満足度」、「スポ少重要性」、「一週間当たりの練習日数」、「スポ少入団理由」の4項目を再調査した。スポ少満足度はスポ少活動に対する満足度について、「1.とても満足(1点)」から「4.とても不満(4点)」の4段階評定に回答を求めた。スポ少重要性は“あなたの小学校生活を考えた場合、スポ少はどのくらいの割合(重要性)をしめていましたか”の問いに対して、「1.小学校生活のすべて(1点)」から「5.小学校生活の一部(5点)」の5段階評定に回答を求めた。スポ少入団理由は“そのスポーツがしたいから”、“上手になりたいから”、“仲のよい友だちが入っているから”等の10の入団理由について、一つだけ選択させた。なお、これら質問項目に対する回答は、現在における評価ではなく、9年前のスポ少活動当時の記憶を想起して回答するように注記した。
- 3) 9年前のスポ少活動に関する項目の評価の想起と現在の評価：9年前のスポ少活動に関して、スポ少への活動意欲に対する評価、指導者に対する評価、チームメートに対する評価、家族の理解と応援に対する評価について、9年前のスポ少活動当時の評価を想起(以下、「評価想起」と略す)させ、併せて現在どのよ

うに評価しているか(以下、「現評価」と略す)を調査した。スポ少への活動意欲に対する評価には「1.常に一生懸命に取り組んでいた(4点)」から「4.しかたなく参加していた(1点)」,指導者に対する評価には「1.非常に尊敬していた(4点)」から「4.まったく尊敬していなかった(1点)」,チームメートに対する評価には「1.非常に満足していた(4点)」から「4.不満足であった(1点)」,家族の理解と応援に対する評価には「1.非常に理解と応援があった(4点)」から「4.まったく理解も応援もなかった(1点)」の4段階評定にそれぞれ回答を求め、評価想起と現評価でそれぞれ合計点を算出した。合計点の範囲は4(評価が非常に低い)から16(評価が非常に高い)である。

- 4) 現在のスポーツ活動状況やスポーツ観等：現在のスポーツ実施(以下、「スポーツ実施」と略す)の有無、現在のスポーツ活動の好嫌(以下、「スポーツ活動の好嫌」と略す)、スポ少活動によるその後のスポーツ活動への影響度(以下、「スポ少影響度」と略す)、と現在のスポーツ観(以下、「スポーツ観」と略す)を調べた。スポーツ実施の有無には「1.実施(1点)」と「2.非実施(0点)」の2段階評定に、スポーツ活動の好嫌には「1.非常に好き(6点)」から「6.非常に嫌い(1点)」の6段階評定に、スポ少活動影響度には「1.非常に影響を受けた(6点)」から「6.まったく影響を受けなかった(1点)」の6段階評定にそれぞれ回答を求めた。スポーツ観については、“勝利志向”、“競技価値観”、“競技統制感”、“達成動機”、“身体的有能さ”の5構成因子よりなるスポーツ観測定尺度21質問項目(青木・松本, 1997)を用いて測定した。各項目に対して「1.あてはまる(4点)」から「4.あてはまらない(1点)」の4段階評定に回答を求め、合計点(逆転項目は点数を逆転)を算出してスポーツ観得点とした。得点の範囲は21-84点である。

4. 分析方法

項目間の相互関連についてはスピアマンの相関係数を算出して分析した。スポ少満足度に関する想起の変化に関連する要因については、関連するとして選択した要因の規定力の強さとBest-fit Modelの要因を明らかにするために、5%有意水準をめぐにした変数増減法による重回帰分析を用いた。想起の変化に関連する要因として最終的に取り上げた項目は、性別、スポーツの好嫌、スポーツ実施、スポ少影響度、スポ少現評価、スポーツ観の6要因である。なお、性別とスポーツ実施はダミー変数として、重回帰分析に投入した。

Ⅲ. 結果

1. 9年前のスポ少活動に関する項目の想起の正確性

9年前のスポ少活動に関する内容の想起の正確性を検討するために、9年前にスポ少活動に関する調査で用いた質問項目と同一である質問項目、すなわちスポ少満足度、スポ少重要性、一週間当たりの練習日数、スポ少入団理由を再調査して、9年前の結果（回答）と今回の想起（回答）を比較した。比較は「9年前の調査結果（回答）」から「今回の調査結果（想起）」を引くこととした。その結果を表2-5に示す。

表2. スポーツ少年団満足度に関する想起の一致度

一致度 ⁺ の程度	-3	-2	-1	0	1	2
該当者数（%）	2(1.0)	19(8.7)	54(24.8)	93(42.7)	41(18.8)	9(4.0)

⁺「9年前の調査結果（回答）」－「現在の調査結果（想起）」：0は一致、－は不満の方向に変化、＋は満足の方向に変化

表3. スポーツ少年団重要性に関する想起の一致度

一致度 ⁺ の程度	-3	-2	-1	0	1	2	3	4
該当者数（%）	6(2.8)	43(19.7)	34(15.6)	57(26.1)	32(14.7)	30(13.8)	14(6.4)	2(0.9)

⁺「9年前の調査結果（回答）」－「現在の調査結果（想起）」：0は一致、－は“小学校生活の一部”方向に変化、＋は“小学校生活の全部”の方向に変化

表4. スポーツ少年団活動の一週間当たり練習日数に関する想起の一致度

一致度 ⁺ の程度	-3日	-2日	-1日	0日	1日	2日	3日
該当者数（%）	12(5.5)	12(5.5)	29(13.3)	145(66.5)	10(4.7)	6(2.8)	4(1.8)

⁺「9年前の調査結果」－「現在の調査結果」：0は一致、－は練習日数が多い方向に変化、＋は練習日数が少ない方向に変化

表5. スポーツ少年団活入団理由に関する想起の一致度

一致度 ⁺ の程度	一致	不一致
該当者数（%）	63(28.9)	155(71.1)

⁺「9年前の調査結果（回答）」－「現在の調査結果（想起）」

スポ少満足度に関する想起の一致度（正確性）については、9年前調査の回答と現調査の想起が一致した割合は42.7%で、不一致の割合が57.3%であった。不一致の34.5%は不満の方向に想起が変化しており、22.8%は満足の方に想起が変化していた。スポ少重要性に関する想起の一致度については、一致した割合は26.1%で、不一致の割合が73.9%であった。不一致の38.1%は“小学校生活の一部”の方向に想起が変化しており、35.8%は“小学校生活の全部”の方向に想起が変化していた。一週間当たりの練習日数に関する想起の一致度については、一致した割合は66.5%で、不一致の割合が33.5%であった。不一致の24.3%は練習日数が多い方向に想起が変化しており、9.3%は練習日数が少ない方向に想起が変化していた。スポ少入団理由に関する想起の一致度については、一致した割合は28.9%で、不一致の割合が71.1%であった。

2. 9年前のスポ少活動に関する回答、その想起、

評価等の相互関連

上記「1. 9年前のスポ少活動に関する項目の想起の正確性」の結果では、9年前調査の回答と現調査の想起の一致した割合は調査項目によって異なり、26.1%～66.5%であった。この結果は、現調査の想起が9年前調査の回答を正確に再現するとは言い難い結果である。こうした不一致（想起の不正確性）を引き起こすものとして、その記憶の想起時に今ここの再構成（再構成的想起）がなされることが想定される（太田・多鹿，2000）。そこで、今ここの再構成が成されているかを明らかにするために、現調査の想起と9年前調査の回答やそれらの評価想起、現評価との相互関連を分析した。分析に用いた項目は、入団当時の1回限りの記憶で記憶に定着し難い項目や繰り返しかつ客観的事実として記憶に定着し易い項目である、スポ少入団理由と一週間当たりの練習日数を除いて、スポ少満足度とスポ少重要性とした。その分析結果を表6-7に示す。

表6. 9年前のスポーツ少年団満足度の回答、想起、評価等の相互関連

	1	2	3	4
1. 9年前のスポ少満足度	1.000	0.090	0.105	0.024
2. 9年前のスポ少満足度の想起		1.000	0.630***	0.589***
3. 9年前のスポ少活動の評価想起			1.000	0.811***
4. 9年前のスポ少活動の現評価				1.000

表7. 9年前のスポーツ少年団重要性の回答、想起、評価等の相互関連

	1	2	3	4
1. 9年前のスポ少重要性	1.000	0.140*	0.105	0.078
2. 9年前のスポ少重要性の想起		1.000	0.275***	0.274***
3. 9年前のスポ少活動の評価想起			1.000	0.831***
4. 9年前のスポ少活動の現評価				1.000

スポ少満足度に関しては、想起は9年前調査の回答とは有意な相関（ $r=0.090$, n.s.）を示さず、評価想起（ $r=0.630$, $p<0.001$ ）と現評価（ $r=0.589$, $p<0.001$ ）に有意な相関を示した。一方、スポ少重要性に関しては、想起は9年前調査の回答

（ $r=0.140$, $p<0.05$ ）、評価想起（ $r=0.275$, $p<0.001$ ）と現評価（ $r=0.274$, $p<0.001$ ）に有意な相関を示した。また、両項目において、評価想起と現評価との間に有意で強い相関（ $r=0.811$, $r=0.831$, $p<0.001$ ）が見出された。

3. スポ少満足度に関する想起の変化に関連する要因

上記結果1,2より，想起時には程度の差はあるにしても，想起時の状況によって再構成的想起が起こることが明らかになった．そこで，次に，スポ少活動についての再構成的想起（想起の変化）にどのような要因が関連するのかを探索的に明らかにするべく，スポ少満足度に関する想起の変化に関連する要因を5%有意水準をめどにした変数増減法による重回帰分析によって分析した．想起の

変化は「9年前の調査結果（回答）」－「現在の調査結果（想起）」とした．したがって，想起の変化は－3点（不満の方向に変化）から2点（満足の方

表6. 9年前のスポーツ少年団満足度の回答、想起、評価等の相互関連

原因	平均値（±標準偏差）	満足度の変化との単相関係数	満足度の変化との単相関係数
1) 性別	0.65±0.48	-0.230***	-0.176***
2) スポーツの好嫌	4.58±3.98	-0.008	
3) スポーツ実施	0.44±0.49	-0.096	-0.129*
4) スポ少影響度	4.13±1.60	0.266***	0.197**
5) スポーツ観	50.39±8.30	0.086	-0.148**
6) スポ少現評価	12.09±2.68	0.424***	0.431***
重相関係数（R）			0.525***
（R ² ）			0.275

5%有意水準をめどにした変数増減法による重回帰分析の結果，「性別」，「スポーツ実施」，「スポ少影響度」，「スポーツ観」，「スポ少現評価」の5要因が選択された．その重相関係数は $R=0.525$ ($p<0.001$)であった．標準偏回帰係数 (β) から選択された要因の規定力の方向をみると，性別では女性の方が，スポーツ実施では非実施の方が，スポ少影響度では影響度が強いほど，スポーツ観では低いほど，そしてスポ少現評価では評価が高いほど，満足の方向への変化を促していた．

IV. 考察

1. 9年前のスポ少活動に関する項目の想起の正確性について

9年前のスポ少活動に関する内容の想起の正確性を検討するために，スポ少満足度，スポ少重要性，一週間当たりの練習日数，スポ少入団理由に

ついて，9年前調査の回答と今回の想起（回答）を比較した結果，9年前調査の回答と今回の想起の一致した割合は調査項目によって異なり，26.1%－66.5%であった．この結果から2つのことが推察される．一つは，想起には誤想起や歪み（不一致）が生じること．二つ目は，想起事項（内容）によって，誤想起や歪みの割合が異なることである．前者は，その記憶の想起時には再構成的想起がなされることを物語っている．すなわち，自伝的記憶が想起される際，過去の出来事や経験のレプリカがそのままの形で機械的に再現されるわけではなく，想起時に今ここの再構成がなされ，想起時の状況によって，想起される内容（自伝的記憶）の選択や歪みが生じることになったと言えよう（Bruner, 1994；Ross and Buehler, 1994；高野, 1995；佐々木, 1996；佐藤, 1998；遠藤, 1999；太田・多鹿, 2000）．佐藤（1997）

は大学生に「自分の人生を振り返って『重要な出来事』を5つ以上想起」させ、約2ヶ月半後に再想起を求めた結果、ほぼ同じ記述のケースは38%であったと報告している。神谷(1997)も大学生を調査対象にして、「これまでの人生を振り返って最も印象に残っている個人的エピソードを3つ」と「最近1ヶ月くらいに起きた印象的な出来事3つ」を約1ヶ月後に想起させた結果、それぞれ62.3%と43.4%の一致率であったことを明らかにしている。一方、Linton(1982)は毎日の生活のなかで起こる出来事を日誌に記録し、一定期間後にそれらの出来事の想起を行った結果、記録した出来事の30%が6年間の実験期間に忘却したことを報告している。こうした先行研究を概括すると、想起時に誤想起や歪み(再構成的想起)がある一定の割合で起こると言えよう。次に、では、想起の正確性や再構成的想起の起こる割合の差異は何によるのであろうか。先行研究によれば、情報の持つ意味(有意味)、具体的内容かどうか(具象性)、イメージの形成されやすさ、熟知性、記憶者の意図の有無、記憶材料の呈示頻度や親近性、さらに新しい環境、加齢の過程、自我成熟の過程などの様々な要因が記録した情報の再現確率に影響を及ぼすという(高野, 1995; 浮田・賀集, 1997; 太田・多鹿, 2000)。特に、出来事の親近性よりも、出来事的重要性や強い感情を伴うことが自伝的記憶保持に強く関与していると推定されている(神谷, 1997; 佐藤, 1998)。したがって、本研究での想起の一致性(正確性)が調査項目によって異なり、28.9%–66.5%であったことは、9年前当時のスポ少活動における、この調査項目内容の重要性、感情の濃淡、有意味性、具象性、イメージ形成性やその後の自我成熟等が複雑に反映した結果と考えられる。いずれにしろ、想起の正確性が3-7割であるという結果は、今後、想起を骨格とした調査研究での結果の信頼性と限界を再検討する必要があると言える。

2. 9年前のスポ少活動に関する回答、その想起、評価等の相互関連について

9年前調査の回答と今回の想起の一致した割合は調査項目によって異なるものの、26.1%–66.5%であり、自伝的記憶の想起時に再構成的想起がなされていると推察される。そこで、想起時の再構成的想起はどのような項目と関連を持つのかを検討するために、スポ少満足度とスポ少重要性について、現調査の想起と9年前調査の回答やそれらの評価想起、現評価との相互関連を分析した。その結果、スポ少満足度に関しては、想起は9年前調査の回答とは有意な相関($r=0.090$, n.s.)を示さず、評価想起($r=0.630$, $p<0.001$)と現評価($r=0.589$, $p<0.001$)と有意な相関を示した。一方、スポ少重要性に関しては、想起は9年前調査の回答($r=0.140$, $p<0.05$)、評価想起($r=0.275$, $p<0.001$)と現評価($r=0.274$, $p<0.001$)と有意な相関を示した。しかも、両項目において、評価想起と現評価との間に有意で強い相関($r=0.811$, $r=0.831$, $p<0.001$)が見出された。したがって、スポ少満足度とスポ少重要性に関する限りであるが、想起は9年前調査の回答よりも現調査での評価想起や現評価と強い関係がある。すなわち、想起は現調査時でのスポ少評価に強く影響された再構成が起こったと考えられる。

想起時の再構成的想起は、情報の有意味性、具象性、イメージの形成容易性、熟知性、記憶者の意図の有無、記憶材料の呈示頻度や親近性、新しい環境、加齢の過程、自我成熟過程などの様々な要因によって影響されて変動するとみなされている(高野, 1995; 浮田・賀集, 1997; 太田・多鹿, 2000)。しかし、その基となるのは、Ross and Conway(1986)、Ross(1989)、Ross and Buehler(1994)が明らかにしたように、現在の自己に基づいて過去が再想起されることであろう。それも又、佐藤(1998)が自伝的記憶の研究をレビューして指摘するように、今現在の自分を支えるのに都合のよい記憶が選択的に想起されると考えられる。本研究結果においても、想起は9年前調査の回答よりも現調査での評価想起や現評価と強い関係を示した。このことは、少なくとも9年前のスポ少活動での出来事や経験のレプリカがそのまま

の形で機械的に再現されるわけではなく、想起時での状況や価値判断や評価が強く反映している（再構成）と言えよう。それは、想起時での回答者のスポーツに関わる自己に基づいて再構成がなされることを伺わせる。ただし、スポーツ場面での再構成的想起に関わる自己の関わりについては、今後、精力的に研究を進めなければならない領域（課題）であり、研究の進展を期待したい。

3. スポ少満足度に関する想起の変化に関連する要因について

想起の変化がどのような要因と関連するのかを探索的に探るために、スポ少満足度に関する想起の変化について、その関連要因を5%有意水準をめどにした変数増減法による重回帰分析を用いて分析した。その結果、性別、スポーツ実施、スポ少影響度、スポーツ観、スポ少現評価の5要因がスポ少満足度に関する想起の変化に有意に関連する要因として選択された。標準偏回帰係数（ β ）から選択された要因の規定力の方向をみると、性別では女性の方が、スポーツ実施では非実施の方が、スポ少影響度では影響度が強いほど、スポーツ観では低いほど、そしてスポ少現評価では評価が高いほど、9年前の回答よりも満足の方に評価を変えている（再構成的想起）と言える。

したがって、スポ少満足度に関する想起では、想起時の再構成的想起はスポ少活動に関わる現在の評価・態度や現在でのスポーツ活動に関わる実施状況や態度・意見（スポーツ観）の影響を強く受けていると言えよう。すなわち、現在、スポーツを実施していることやスポーツ実施によってスポーツ観（勝利志向、競技価値観、競技統制感、達成動機、身体的有能さ）が確立・内面化されることで、子ども時代（9年前）の絶対化されがちなスポ少活動が相対化された結果、想起では不満足の方に記憶の再構成が起こったと推察される。一方、スポ少活動の影響度や現評価が今でも高い場合は、そのために9年前調査時の回答に関わらず、現状で満足という回答になることで満足の方に記憶の再構成が起こったと考えられ

る。また、性別では、女性が満足の方に有意に関連している（男性は不満足の方に関連する）のは、スポーツの実施率が男性の約1/2であるために、スポーツ実施やスポーツ観によって、9年前のスポ少活動の相対化が男性ほど起こらないためであろう。こうした本結果は、上記2で考察したように、想起時での9年前のスポ少活動に関する評価のみならず、スポーツの実施やスポーツに関する態度・意見や価値判断等のスポーツを巡る自己に基づいて再構成がなされること裏付けるものでであろう。

IV. 要約

9年前にスポ少団員であった446名を調査対象者として、9年前のスポ少活動に関する想起の正確性と想起の変化に関連する要因を明らかにする目的で再調査した結果、218名（男性148名、女性70名）の有効回答を得た。そのデータを分析した結果、以下のような結果を得た。

- 1) スポ少満足度、スポ少重要性、一週間当たりの練習日数、スポ少入団理由に関する想起の一致度（正確性）については、それぞれ42.7%、26.1%、66.5%、28.9%であった。
- 2) スポ少満足度に関する想起は9年前調査の回答とは有意な相関を示さず、評価想起（ $r=0.630$, $p<0.001$ ）と現評価（ $r=0.589$, $p<0.001$ ）に有意な相関を示した。また、スポ少重要性に関する想起は9年前調査の回答（ $r=0.140$, $p<0.05$ ）、評価想起（ $r=0.275$, $p<0.001$ ）と現評価（ $r=0.274$, $p<0.001$ ）に有意な相関を示した。
- 3) スポ少満足度に関する想起の変化に関連する要因を5%有意水準をめどにした変数増減法による重回帰分析で分析した結果、性別、スポーツ実施、スポ少影響度、スポーツ観、スポ少現評価の5要因が選択された。その重回帰係数は $R=0.525$ （ $p<0.001$ ）であった。標準偏回帰係数（ β ）から選択された要因の規定力の方向をみると、性別では女性の方が、スポーツ実施では非実施の方が、スポ少影響度では影響度が強いほど、スポーツ観では低いほど、そしてスポ少

現評価では評価が高いほど、満足の方向に想起が変化していた。

以上の結果から、想起時に今ここのスポ少評価による再構成想起が起きていること。また、想起の変化に今ここのスポ少評価や影響度のみならず、今ここのスポーツの実施やスポーツ観等のスポーツへの参与状況が関連していると推察される。

注1)重回帰分析での多重共線性を避けるために、独立(説明)変数として考えられる要因(調査項目)の内、相互に相関の高い要因は一方を代表させた(例えば、スポ少想起評価とスポ少現評価の間には $r=0.811$, $p<0.001$ があるので、スポ少現評価で代表させた)。

文献

- 青木邦男(1996)スポーツ少年団への団員の過度適応と学校への適応との関係。体育学研究40(5):291-303.
- 青木邦男・松本耕二(1997)高校運動部員の部活動適応感に関連する心理社会的要因。体育学研究42(4):215-232.
- 青木邦男(1989)高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因。体育学研究34(1):89-100.
- Bruner, J. (1994) The "remembered" self. In U. Neisser and Fivush (Eds) The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative. Cambridge University Press: New York, pp.41-54.
- 海老原修(1988)組織的スポーツからのドロップアウトに関する研究。体育・スポーツ社会学研究7:107-129.
- 海老原修(1991)スポーツ社会化における成果と課題。体育・スポーツ社会学研究10:153-171.
- 遠藤由美(1999)自己と記憶。川口潤編 現代の認知研究-21世紀に向けて。培風館:東京, pp.146-158.
- 江刺正吾(1982)スポーツ参与の社会化にみられる性差の検討-児童・生徒・学生のスポーツ意識と行動を中心に-。体育・スポーツ社会学研究1:137-160.
- 藤原雅彦・宮下一博・大野木裕明・中澤潤編著(1998)質問紙法。北大路書房:京都, pp.2-8.
- 樋上弘之・中込四郎・杉原隆・山口泰雄(1996)中・高齢者の運動実施を規定する要因:心理的要因を中心にして。体育学研究41(2):68-81.
- 市川伸一・伊藤裕司・渡邊正孝・酒井邦嘉・安西祐一郎(1994)記憶と学習。岩波書店:東京, pp.101.
- 稲地裕昭・千駄忠至(1992)中学生の運動部活動における退部の研究:退部因子の抽出と退部予測尺度の作成。体育学研究37(1):55-68.
- 神谷俊次(1997)自伝的記憶の感情特性と再想起可能性。アカデミア(南山大学紀要)自然科学・保健体育編6:1-11.
- 金崎良三・橋本公雄(1995)青少年のスポーツ・コミットメントの形成とスポーツ行動の継続化に関する研究:中学生・高校生を対象に。体育学研究39(5):363-376.
- 北村尚浩・川西正志・池田勝(1997)スポーツ参加者のスポーツライフスタイルとコミュニティ感情。体育学研究4(6):437-448.
- Linton, M. (1982) Transformations of memory in everyday life. In U. Neisser(Eds.) Memory observed: Remembering in natural contexts. W.H. Freeman: San Francisco, pp.77-91.
- 見田宗介・栗原彬・田中義久編(1988)社会学事典。弘文堂:東京, pp.373-374.
- 村田光二・山田一成編著(2000)社会心理学研究の技法。福村出版:東京, pp.22-39.
- 西田晴彦・新睦人編著(1980)社会調査の理論と技法(I)。川嶋書房:東京, pp.195.
- 太田信夫・多鹿秀継編著(2000)記憶研究の最前線。北大路書房:京都.
- Ross, M. (1986) Relation of implicit theories of construction of personal histories. Psychological Review 96:341-357.
- Ross, M. and Conway, M. (1986) Remembering one's own past: The construction of personal histories. In R. M. Sorrentino and E. T. Higgins(Eds.)

Handbook of Motivation and Cognition: Fundamentals of social behavior. Guilford Press: New York, pp.122-144.

Ross, M. and Buehler, R. (1994) Creative remembering. In U. Neisser and Fivush (Eds) The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative. Cambridge University Press: New York, pp.205-235.

佐々木正人編 (1996) 想起のフィールドー現在のなかの過去. 新曜社: 東京.

佐藤浩一 (1997) 自伝的記憶の反復想起における安定性と変化. 日本心理学会第61回大会発表論文集, pp.774

佐藤浩一 (1998) 「自伝的記憶」研究に求められる視点. 群馬大学教育学部紀要 (人文・社会科学編) 47:599-618.

高野陽太郎編 (1995) 認知心理学 2 記憶. 東京大学出版会: 東京, pp.225-252.

田中平八編著 (1988) 現代心理学用語辞典. 垣内出版株式会社: 東京, pp.57.

徳永幹雄・金崎良三・多々良秀雄・橋本公雄 (1985) スポーツ行動の予測と診断. 不昧堂出版: 東京.
筒井清次郎・杉原隆・加賀秀夫・石井源信・深見和男・杉山哲司 (1996) スポーツキャリアパターンを規定する心理的要因: Self-efficacy Modelを中心に. 体育学研究40 (6) :359-370.

辻新六・有馬昌宏 (1987) アンケート調査の方法. 朝倉書店: 東京, pp.35-93.

浮田潤・賀集寛 (1997) 言語と記憶. 培風館: 東京, pp.99-120.

谷口幸一・古谷学 (1993) 高齢者の日々の運動実施に影響する心理・社会的要因の検討. 体育学研究38 (2) :99-111.

山口泰雄 (1994) 中高年のスポーツへの再社会化. 科研費研究成果報告書.

山本教人 (1990) 大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較. 体育学研 35 (2) : 109-119.

SUMMARY

Accuracy in remembering Junior Sports Club 9 years ago and factors related to changes of remembering

Kunio AOKI

Abstract

The present study was designed to clarify accuracy in remembering Junior Sport Club 9 years ago and factors related to changes of remembering. The data were obtained through questionnaire distributed to 218 (148 males, 70 females) persons participating in Junior Sport Club 9 years ago.

The main findings were as follows:

- 1) The degree of accuracy (the same) in remembering satisfaction in Junior Sports Club, significance of Junior Sport Club, practice times per week, reason for participating in Junior Sports Club were 42.7%, 26.1%, 66.5%, 28.9%, respectively.
- 2) The remembering satisfaction in Junior Sports Club correlated with remembering estimation of Junior Sports Club 9 years ago ($r=0.630, p<0.001$) and present estimation of Junior Sports Club 9 years ago ($r=0.589, p<0.001$). And, the remembering significance of Junior Sports Club correlated with answer on significance of Junior Sports Club 9 years ago ($r=0.140, p<0.05$), remembering estimation of Junior Sports Club 9 years ago ($r=0.275, p<0.001$) and present estimation of Junior Sports Club 9 years ago ($r=0.274, p<0.001$).
- 3) As a result of multiple regression analysis using the stepwise method to clarify factors related to changes of membering satisfaction in Junior Sports Club 9 years ago, "gender", "doing sports at the present day", "the influence of Junior Sports Club 9 years ago", "the view of sport", "present estimation of Junior Sports Club 9 years ago" were found to

be statistically significant($p < 0.05$). The multiple correlation coefficient was $R = 0.525$ ($p < 0.001$).

Judging from each standardized partial regression coefficient of factors, female, not doing sports at the present day, much influence of Junior Sports Club 9 years ago, higher degree of the view of sport, present high estimation of Junior Sports Club 9 years ago respectively was proved to increase the satisfaction in Junior Sports Club 9 years ago.